

谷 村

〔都 留 市〕

郡内地域の政治・経済の中心であった谷村を、絵図でみる事が出来るのは「谷村城下絵図」である。この絵図は秋元氏時代の谷村の城郭や武家屋敷、そして町家の状況を教えてくれる貴重なものである。

谷村は、天文元年（一五三〇）に小山田氏がその居館を中津森から移した時から郡内の政治の中心になったのであるが、小山田氏が滅亡してからも、鳥居・加藤・浅野といった諸氏がここに拠り、ついで秋元氏が寛永十年（一六三三）に都留郡一万八〇〇〇石を領して谷村に在城し、以後宝永元年（一七〇四）まで七一年間にわたって、郡内地域の村々を統治したのである。

秋元氏の谷村在城は三代（泰朝・富朝・喬知）にわたっていたが、この間に老中職など幕府の要職についていたこともあって江戸詰めが多く、谷村に來たのは比較的少なく、その代わりに高山五兵衛らの家臣が谷村に居住して政務をとっていたものと思われる。

秋元氏時代の谷村の状況を知ることのできるこの絵図には、上部に勝山城、そして中央に位置する城主居館とそれを取り囲むように家臣団の屋敷が配置され、また御蔵、馬場、足輕屋敷なども描かれている。この武家屋敷と白木山寄りに並ぶ長安寺・円通院などの寺院との間に、上町・新町・中町・下町といった町家が街道ぞいに立ち並んでいるのがわかる。このように城郭、武家屋敷、町家、寺院などの整然とした町割りが見られること、そして武家屋敷のブロックと町家の間には塀や番屋を置いて両者をはっきりと区分しているところは、城下町の典型ともいえるものである。

勝山城は自然の要害ではあるが、この時期では城郭としては使われず、東照宮やお茶壺蔵などが残されているだけで、桂川にかかった内橋で谷村の居館と結ばれている。今の市役所や谷村第一小学校辺に位置する城郭は田原の大堰からひかれた家中川に囲まれている。この堀割の内部は、「向御屋敷」を除くと本丸・二の丸、または居館の区別は描かれていないが、こうした絵図には書かれないのがむしろ普通である。

家臣の屋敷では大手通りに面して屋敷地を持つ高山五兵衛の居宅が目をひく。高山は五〇〇石の禄高を貰う「年寄」で城代家老といったところだろう。この高山家のほかにも堀割を囲むところに屋敷地を持つ福井伝左衛門・堀内重大夫・高山源五郎・安中六兵衛の屋敷、そして中町の薬師堂への入り口近くの高山伝左衛門の屋敷地が絵図の上ではやや大きく描かれている。こうした家臣について詳しいことはわからないが、「家監全録」という記録には高山伝左衛門と安中六兵衛の名が見える。いずれも高禄の家臣である。その他の武家地は高山五兵衛を含めて九〇家も書き込まれているが、これら屋敷地には多少の広狭の差はあるが、そう大きな違いはないように見える。秋元家の重臣として、郡内地域の史料に高山五兵衛とともにしばしば出てくる林善兵衛や矢貝清大夫・今井半兵衛などは、同姓の家はあるがここでは確認できない。なお、前述した高山伝左衛門は天和二年に江戸深川で大火にあった松尾芭蕉の寄寓先である。薬師堂の入り口に近いところに名前が見える上田見徳は侍医である。

こうした武家屋敷の状況に対し、寺院は現在もほぼ同じ場所にあることが確認できよう。東の山付きにある西涼寺（浄土宗）・専念寺（浄土真宗）・東漸寺（日蓮宗）、そして南側の山寄りに円通院（曹洞宗）と長安寺（浄土宗）・西願寺（浄土真宗）、そして城郭の一部に入るところに広い敷地を持つ泰安寺（天台宗）というのがある。これらの寺院の開創はいずれも古くからと伝えられているが、西涼寺や長安寺が鳥居氏、円通院は秋元氏といったように、谷村在城の領主との関わりが現在のようないくつかの位置に収まっていたのである。寺院関係で注目すべきは、絵図の西側、城郭の一部に入るといってもよい泰安寺であろう。ここは秋元氏の菩提寺である。転封の多かった秋元氏はその都度菩提寺を移して、これまでのを廃寺にしていたの



谷村の遠景

である。宝永元年に川越転封の際にこの泰安寺を廃寺にし、埋葬されていた泰朝と富朝は川越に改葬されていた。現在この泰安寺について知る人は少ない。

次に町地を見て行こう。秋元氏時代のこの絵図を見ると、城下の町地は団塊状でなく街道ぞいに連なっていて、街村状である。西から町地は上町・新町・中町・横町・下町と並んでいる。町地の順が富士山の側から始まっているのも注目される。ただ天文元年に小山田氏が谷村に城下を移したときには上・中・下の三町だけであったといわれている。その後まず下町から横町が分出し、下町・中町とともに下谷村を構成した。また下町と上町の間には町家がなかったが、やがて新町が出来て町家が続くようになり、さらに早馬町が加わり、小字の名でしかなかった天神町（上・下・裏三か町）・袋町もしいに町地になって上谷村に加わっていったといわれている。

行政的に上谷村と下谷村の二つに分かれるようになったのは文禄三年（一五九四）のことであるが、ここで注目したいのは上谷と下谷の二つの町の氏神が違うことである。下町・中町は八朔の祭で知られている生田神社が氏神で、これに対し上町は、後に上天神町を加わって、金山神社で祭祀を行っている。同じ城下でありながら下町・中町と上町の氏神が違うことは、やはり、二つの町地の形成過程の違いからとみてよいであろう。

なお、城下であっても町と言わずに村といっているのは、下谷村に深田・新井・羽称子・鷹巢、上谷村にも久保田・原といった農村部分が含まれていたというだけでなく、村と同じ取り扱いをして年貢をとるという領主側の方針によっているからである。こうしたケースは他の小さい城下町に見られることである。

これまで、「谷村城下絵図」の紹介を兼ねながら、武家屋敷・寺院・町家について概観してきた。ここに収録したのは中町の横山脩治家に所蔵されている絵図であるが、このほかに加畑の森嶋芳彦氏所蔵、法能の志村徳雄氏所蔵、山梨県立図書館の甲州文庫所蔵、そして市長室にある絵図などがある。いずれも原本とはいえない写本であるが、どれが善本であるか判断するのは難しい。この五枚の絵図に記載されている人名・記号を詳細に検討してみると、志村家のものは他の四枚とやや違うことに気がつく。写本の系統が違うのか、書写のさいの誤りが多いためかは判らない。また勝山城の描写が二通りあるのも気づくし、絵図の色の付けかたに違いがあるが、どうしても原本の所在がつかめない以上、このなかで比較的誤謬の少ないと思われる横山家所蔵の絵図をここに収録することにした。

この「谷村城下絵図」は、上記のような写本を今日に伝えているが、これを補う意味で広島市立図書館の浅野文庫にある「諸国当城之図」に収録されている「谷村城下絵図」をつぎに紹介する。

この城郭絵図集は、浅野家当主の軍学研修のための資料として、天和初年から元禄初年ころの城下絵図をもとに作成されたもので、全国の城郭・城下の一五四図が収められている貴重なものである。この絵図もこれまで紹介してきた「谷村城下絵図」と同じような武家屋敷や町家の配置であるから、谷村に伝えられている秋元氏時代の絵図の信頼性を高めることになる。ただ、この浅野文庫の絵図は、勝山城の部分が同文庫の「諸国古城之図」にある岩殿城（大月市）の図の引き写しになっていることは間違いない。なお絵図の南側の街道ぞいに書かれている上原村（かみはら）というのを『浅野文庫蔵諸国当城之図』の解

説では上谷村の誤りだろうとしているが、これは誤記ではなく地名としていまも伝えられている。カンノン堂というのは普門寺にあるものだろう。部分的におかしなところもあるが、浅野文庫の絵図で裏付けられる「谷村城下絵図」は、現在の谷村の市街地の原形が出来ていることを教えてくれる貴重なものである。

さて、秋元氏が宝永元年（一七〇四）に川越に転封を命じられたあと、郡内地域が天領になり、これまでのような武家屋敷がなくなったことで町はどう変化しただろうか。

この時期の谷村の状況を窺うことの出来る絵図として小俣聡家所蔵の「城跡地地割絵図」（享保十年）がある。この絵図の裏書によると、城下の武家屋敷の跡地は両谷村と川棚村の者で小作していたが、こんど買い請けることになったので下谷と上谷の境目を確定するため作成したものである、という。この絵図は秋元氏が転封したあとの状況を的確に描いているといえてよい。かつての城郭や武家地はほとんどが畑になっていて、いまは賑わっている高尾町の通りも畑の中というのが一目瞭然である。しかし、この地域を除くと町家や寺院とかの区画の基本型は変わっていないことがわかる。

このように、秋元氏転封によって谷村は一挙に農村に変わったというわけではなく、在町への転換がしばらくなされていた。もちろん享保十七年（一七三二）の史料に、かつては商売で賑わっていたが「廿八年以前酉年御掃城にて御領に罷りなり候以後は諸商売も御座なく、村中の者ども諸作計りにて渡世相送」るようになってたと記しているのがある。秋元氏転封の打撃の大きかったことを窺うことができる。

それでも、谷村には石和の代官所の出張陣屋が置かれ、御蔵が残ったこともあって、郡内の政治的中心としての地位を保ち続けることになった。谷村陣屋はもと高山源五郎の屋敷跡で、一〇八〇坪の敷地に陣屋と長屋などが建てられ、代官所手代などが滞在していた。郡内の村々は、陣屋への訴訟や年貢納入を行うさいに、谷村にある郷宿を利用したから、近隣から集まる人々の数は多かった。また、谷村は郡内地域の織物業の発展によって、その集散地として繁栄していったのである。下谷村の村明細帳によると、絹問屋は四軒で、取引先は江戸駿河町の越後屋、日本橋の白木屋などの大問屋が九軒も記されていて、織物の集散が活発であったことを示している。

この上谷村と下谷村の石数と戸数・人口を文化三年（一八〇六）の『甲斐国志』でみると、上谷村は高六二九石余で、二八五戸・一三四六人の規模である。下谷村は、高八一七石余で、二四二戸・一五五四人。両谷村合わせると戸数は五三二戸、人口は二九〇〇人という、この地域では極めて大きい町場であった。そして明治二十五年（一八九二）の『山梨県市郡村誌』には谷村町の戸数は一〇〇三、人口は四〇四九である。幕末・明治前期にも人口を増大させている。

ここで、附図に入っている天保十五年（一八四四）の「下谷村屋敷割絵図」二枚を紹介する。この絵図は谷村町役場に保存されていたもので、絵図の裏書によると、下谷村の田畑所持者の変動があつて、誰の土地なのかははっきりしなくなったので、土地台帳と突き合わせるためこの田畑耕地絵図面を作ることにした、という作成事情が記されている。

この下谷村の絵図で興味深いのは、街道の両側に展開する町家の状況である。どの町屋も間口が狭く、奥行が長い、短冊状の敷地である。この絵図に見られる下町と横町の直角に曲がっている状況は現在と同じである。この町屋の裏手は秋元氏時代の武家屋敷のあったところで、絵図ではすべて畑表示になっている。ここは当時「家中畑」といわれていたことがこの絵図の表題からわかる。武家屋敷がなくなっているだけで、かつての城下が街道すじに連なっている宿場町的なものになり、また上谷村と接するもと高山源五郎の屋敷のところに置かれた代官所の陣屋とか山側の寺院など、秋元氏時代の名残りともいえるべきものが、この絵図から読み取れる。

もう一つの「上谷村屋敷割絵図」は、仲町の横山脩治家に所蔵されているもので、作成年月は不明であるが、下谷村とはほぼ同じ作り方であるので、天保期を前後する近世後期であることは間違いないだろう。この



高尾町通りの商店街

絵図では屋敷地ごとに面積をきちんとだしていること、また屋敷地割りとは別に実際に分合して町家を建てている状況を家屋の形で描いているのが注目される。視覚的に町場の様相を窺えるという意味で貴重な絵図である。

この上谷村と下谷村の絵図で共通している地番の記入の仕方から、町家の拡大の状況を推定することもできる。まず上谷の状況からみていこう。屋敷一番は下谷に接する道路西側、つまり陣屋前の家から始まり、上谷入り口の石橋のところまでの屋敷六八番までいく、この並びの筆数は六二で、建てられている家は記号で六六ある。ついで屋敷六九番は屋敷一番の反対、道路の東側に移り、新町横丁・山通り入り口・西願寺入り口と進み、屋敷一三九番で終わっている。この通りは六七筆で、家の記号も同じ数だけある。ここまでは街道の両側のところで、まず始めから町家が出来ていたところといえる。

下谷の町屋敷の地番は陣屋屋敷のすぐ街道よりの高札場のところが一番で、西涼寺の門前までいき、ついで反対側に移って戻り、町屋敷一二八番で終わっている。上谷と同じで、街道の両側のところが町屋敷になっているのである。このあとの地番の順は、上谷でみると上天神町の福寿庵付近が早く、屋敷一五八〇番台があり、ついで長安寺横から天神下の付近の屋敷一六〇〇番台に移っている。一方、下谷では陣屋屋敷の直ぐ裏手から新畑になっていて屋敷表示がない。ただ中町の円通院側には永納と表示された区画がある。ここも比較的早く町屋が出来た可能性はある。

近世後期から明治前期にかけての戸数・人口の急増期は、上谷村の山側や下谷村の円通院付近にまず町家をつくりながら拡大していったことを推測しうる。

江戸時代は上谷村・下谷村と行政的には分かれていたが、明治八年（一八七五）一月に合併して谷村になっている。明治期は村役場はもちろん谷村病院・南都留警察・谷村区裁判所・谷村郵便局のほか、尋常高等小学校・県立工業学校・高等女学校などの官公庁や学校が置かれた。また織物などの産出も多く、谷村市場が開かれ、銀行・通運会社・卸小売商などが多く、郡内地域の政治・経済の中心として賑わいを持続していた。谷村町になったのは明治二十九年（一八九六）である。

昭和十七年（一九四二）に三吉・開地の両村と合併した。合併直前の戸数は一八二〇戸、九二八四人である。ついで、同二十九年（一九五四）には谷村と宝・禾生・盛里・東桂が合併して都留市となっている。昭和五十五年で谷村地区の世帯数は四七五二世帯、一万六七二一人である。

谷村地区の景観は、昭和二十四年（一九四九）の大火によつて、下町から横町・栄町のほとんどを焼失したこともあって、かつての面影を見出すことはできないが、秋元氏時代の家中屋敷のあった高尾町や都留市駅のある田町、そして栄町・源生、上谷の方は都留文科大学のある田原までも、店舗や住宅がびっしりたてられていて、かつての面目を一新している。



